Contents

設計特集

連載
住まい文化の栞
住まいは巣まい
住まいのオーダーメード館403
住健住康
庭の話

HABITA 住楽工房（茨城県）

Weekly HABITA 設計特集

063

住まいを考えるとき、設計、間取りは一番時間を要するところです。夢を実現させるために、また、家族にとってより良い間取りにしようと、長い時間を費やして、考え悩みます。

しかし、住宅の正しい設計と間取りの基本をご存じでしょうか？自分の理想の住まいを求めるためには、設計の基本を知っておきましょう。良い設計、悪い設計が見えてくれば、子どもや孫の代まで住み継いでもらえる、損をしない家になります。

人の気配のする住まい

見本

私は世田谷のある先生のお宅にお邪魔じゃましました。100坪程の比較的大きな敷地には欅（けやき）の大木が3本あり、塀は蔦（つた）がはびこっていて、何でできているのかわからない状態ですが、これが風情があってなかなか良いのです。緑の壁で家をとりまいて、これだけ趣があるのは都内でも珍しいものです。私が親しくしていただいている先生のお宅です。

「家に鉄道が通るので見てもらいたい」と言われて、さっそくおじゃましたのですが、敷地に入って、鉄道を探しても、汽車も電車もありません。100坪の敷地の中のどこにあるのかと思って良く見渡すと、主屋のわきに黒い貨車がひっそりと置いてありました。近づいてみると国鉄から払い下げてもらった中古の貨車が1輌。これだと思って良く見るとレールも枕木もあり、レールは車輪の下に1mだけ伸びていました。物入れとして使っておられるそうです。

主屋に入ると、やや低めの天井の部屋で大断面の木造真壁のつくり。このやや低めと言うのが実に落ち着いた空間をかもし出しています。座布団に似たクッションのあるソファに、ゆったりと腰をおろし、お茶をいただいきました。ボソボソと話す先生の話を聞き洩らさないように努めながら、1時間程お話をうかがっていました。

気がついたら、どこかで家人が話合っています。2m程離れたところを行ったり来たりしているようですが、それが一向にじゃまにならないのです。廊下を移動する時は、足をすべらすようにして移動しているようです。お子さんも、リンゴをかじりながら通ったような気もしたが、まったく気になりません。先生の話では、この家には、引戸、ドアが1枚も無いと…。

目線は壁で遮るようにできていて、人物は見えないよう設計しています。引き戸やドアが一枚も無いと、家中の音がみんな聞こえてしまいますが、不思議なことにそれでいて静かなのです。おそらく、客人のある時は、話し声や足音に特に気をつけているのでしょう。そして、普段の暮らしでも御主人、奥様、お子さん、それぞれがお互いを配慮した生活をしているのでしょう。

帰り際、小用をうかがったら、あちらだと手をさしのべたので行ってみたら、トイレにもドアが無いのです。私はびっくりして、用をたさずに帰ってしまいました。

先生は、東京建築学会会長、東京工業大学・東京芸術大学名誉教授の称号をもつ清家　清さん。お子さんは、経済学者で、今は慶應義塾長です。

先生のお宅におじゃまして、考えられた設計に住まいのありかたを改めて気づかされました。個室としての設計を重視するのではなく、家族のありかたを大切にする設計があるのです。同じ室内で、空間を上手く仕切り、ドアを付けないで暮らす方が、思いやりが生まれるのかもしれません。襖ひとつ隔てた、隣の部屋の親、兄弟を思いやる暮らしがあたり前だった昔の家がそうであったように。

住まいの設計のありかたを、皆さんにぜひ知ってもらいたく、今回は設計特集として書きました。

三澤 千代治

3
自宅訪問

正しい間取り

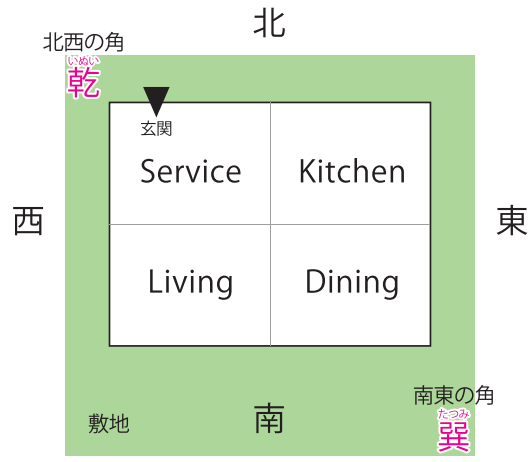
家を建てる時に、昔の人は家相を気にします。若い方も気にする人はいると思いますが、家相をきちんと理解してしっかりと考えられている間取りは昔ほどではなくなりました。

乾（いぬい）方向（北西）に面した乾玄関と、巽（たつみ）方向（東南）に面した巽玄関の家は幸せになると言われていますが、これはこの方角に玄関を持つ家には日当たりの悪い部屋ができないということからです。日当たりの良さが家族の健康にも良いとされ、「幸せになる」と言い伝わったのでしょう。逆に鬼門と呼ばれる方向に玄関があると、日陰の部屋が多くできてしまうため、家族に病人が出やすくなり「不幸になる」と言うのです。

また、北側の台所は良いと言いますが、これは、冷蔵庫のない時代、日の当たるところに食料を置くと腐りやすかったためで、現代はこの位置にこだわる必要ありません。北向きの勉強部屋が良いというのも、勉強するには、ぽかぽかと陽の差すあたたかい部屋より、少し寒いくらいのほうが集中できるからです。書物が日にやけることもありません。

家相とは、家族の健康を願う、生活の知恵から生まれたものだったのです。日当たりが悪ければ、心も体も病気になりがちです。正しい間取りとは、日当たりがよく、子どもたちがすくすくと健康に育ってゆける環境があることです。家相の根拠をしっかりと理解すれば、おのずと良い間取り、正しい設計ができるでしょう。自分たちの要望を取り入れるのは、この基本的なことを踏まえてからです。

住まいは、幸せに暮らすため、子どものためにつくるものなのですから。



家相の科学

家相風水と言われると、「そんな古いこと」と思われるのではないでしょうか？

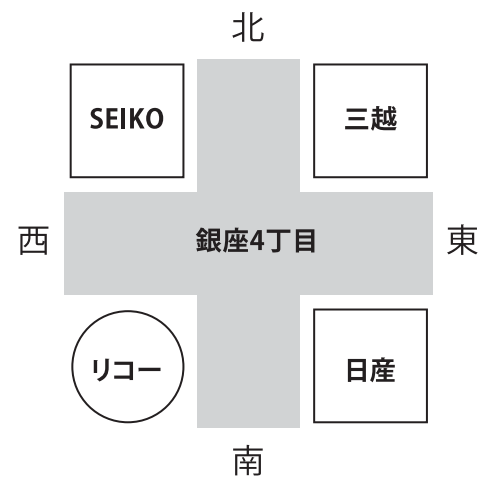
清家 清さんは、「家相の科学」という本を書いておられます。先生を一般財団法人 住宅都市工学研究所にお招きして、しっかりと勉強させてもらいました。上の「正しい間取り」に書かれていることは、家相そのものです。

家相には、3000年の歴史があります。正しい事柄が多く、今も学ぶべきことが多いですが、現代技術の発達により、意味をなさないものになった部分もあります。たとえば、南西のトイレは悪いとされていますが、昔のトイレはほとんどが汲み取り式で、換気扇もなく不衛生でした。南西は真夏に非常に暑くなる場所で、腐敗や雑菌の繁殖が早まり、臭いの問題も出てきます。このような状況のため、昔は母屋と離れた場所にトイレを作ったほどですが、今ではほとんどが水洗なので問題ありません。2階にもトイレがつくられる時代ですから。

日本で1番地価が高いのは、東京の銀座4丁目。この交差点で1番良い場所は、東南の角地で土地価格が最も高いことで知られています。巽（たつみ）玄関を持つSEIKOさんは長い歴史があり、成長し続けている会社です。2番目に良いのは、北西の角、乾（いぬい）に玄関のある日産さんも業績が上がっています。3番目に良い（むしろ悪い）のは、北東の角地。リコーさんは角を嫌って、円型のガラスのビルを建て、今日にいたります。1番悪い角地いっぱいにビルを建てた三越さんは、残念なことに、一時経営不振になってしまいました。国税の評価は、1番SEIKO、2番日産、3番リコー、4番三越となっています。会社の業績なども家相通りになっているところをみると少し恐ろしくなります。

宅地を求めるときは、玄関の位置が巽（たつみ）か乾（いぬい）にできる土地を選ぶとよいでしょう。売却する時、価格が下がってしまい、損をしないためにも気をつけておきたいポイントです。

角地でも場所によって土地の値段が異なるのには、こうした家相の理由が背景にあるのです。



見本

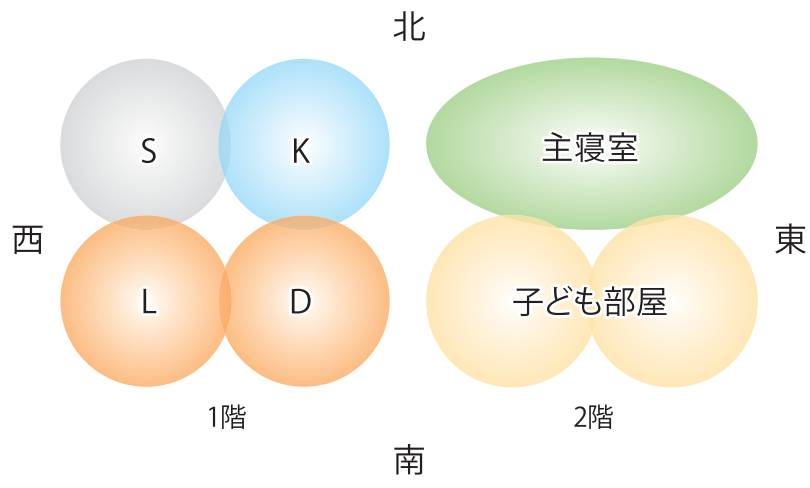
企画住宅の間取り

企画住宅は住宅会社が豊富な経験からお客様に推薦する住まいです。当然、家相のこともしっかりと考えられています。理にかなった間取りで、子ども部屋を日当たりの良いところにし、次にリビング、ダイニングの日当たり、風通りを良くしています。住みやすさを考え、ムダな空間を省き、専門家が考えた「間」で設計した建物に仕上げています。

住まいが古くなって売却する場合、お客様の考えで自由に夢をふくらませた家は、残念ながら価格がつきません。次のお客様は、その家に住めないことが多いからです。ごく一般的にいえば、10年住んだ家はゼロ資産となります。それに対して企画住宅は、多くの人に受け入れられるため、資産価値があると判断され、高く売れるのです。合理的な考えをする米国では、企画住宅が主流です。家を建てる時、手放すことまでは考えないものですが、一度冷静に考えてみてください。

HABITA「みんなの家」の1階には、カフェと呼ばれるリビングダイニングがあります。1階の南側にはダイニング。そしてキッチンは北側に配置。洗面、トイレ、浴室とサービスも北側に。2階は子どもたちと夫婦の部屋です。東側は朝日が入るので、寝室が良いでしょう。将来、子どもが大きくなった時のために、可変自在な空間にしています。

建物の東西南北が美しい型をしており、家自体の価格を上げていることは勿論、街並み形成に協力して近隣の住人ともうまくいくように配慮してあります。住まいづくりの専門家が考えた提案が取り入られています。



2012年度 概算要求にみる住生活施策

2012年度の各省の概算要求が発表された。さらに、第3次補正予算案が閣議決定され、エネルギー危機を視野に入れた住生活に関係する施策が多く打ち出されている特徴がみえてきた。

認定省エネ住宅制度の創設

国土交通省が打ち出した、税制改正要望の中に盛り込まれた「認定省エネ住宅（仮称）」は、より高い省エネ性能への誘導を目的としている。

この認定を受けた住宅については、所得税や登録免許税、個人住民税、不動産所得税、固定資産税の特例措置により、一般住宅よりも税制上の優遇が受けられるよう要望した。

一方、省エネ義務化に向けて2020年度までに全ての建築物に対して、省エネ基準の適合を義務付ける案を公表している。

第3次補正予算で、フラット35S復活

今年9月いっぱいで終了したフラット35Sの金利引下げを、省エネ住宅に限り0.7%引き下げる。被災地は1.0%引き下げる予定。

蓄電池、HEMS、リフォームの魅力

経済産業省は太陽光発電の補助制度に加えて、蓄電池やHEMS（ホームエネルギーマネジメントシステム）補助金制度を設けている。

環境省では、リフォームに特化した補助金を創設する方針だ。

LCCM（ライフサイクルカーボンマイナス）住宅に採択された案に対して補助を行う事業も国土交通省の概算要求の中に盛り込まれた。

各省が取り組む様々な住宅への助成制度により、HABITAの太陽光発電、キャパシタによるスマート住宅、HABITAの街づくり、スマートシティが今後さらに注目されるだろう。

長持ちする設計

棟の高い家はめでたい

棟が高く、急勾配の屋根は水はけが良く長持ちします。デザインを重視した勾配のない屋根は、雨漏りや耐久性に悩まされる可能性が高いため、要注意です。「うだつが上がる」という言葉がありますが、うだつとは、屋根のてっぺんにある装飾を施した瓦のことです。うだつを上げるためにはそれなりの出費が必要だったことから、富の象徴になり、屋根上には競って立派なうだつが上げられました。これが「生活や地位が向上しない」「見栄えがしない」という意味の慣用句「うだつが上がらない」の語源になったのです。昔、平民が少しでも屋根を高く積み上げ、武士の家に近づこうとしたことから生まれた言葉。棟の高いことは理にかなったうだつの上がる話です。

軒が深く、庇の長い家は夏涼しく、冬暖かい。

軒の出が深く、庇も長いことは日本建築の特徴です。太陽の位置が高い夏は、家の中まで太陽光が入らないので涼しく過ごせます。冬は太陽の位置が低いので、家の奥まで光が差し込んで暖かいという自然エネルギーを利用して、効率的に生活することができる先人の知恵です。開口部や外壁に雨があたることを防ぎ、家の耐久性を高めるための効果もあります。最近では庇のないデザイン住宅があふれていますが、軒の出や庇のない家は家づくりの基本から間違っています。そんな家に限って高断熱高気密とうたっているからおかしな話です。日本の気候風土がもたらした形ですから、軒や庇は当然あるべきものなのです。

高い基礎は耐久性が長い

昔の木造住宅には縁の下がありました。そこに薪などを入れて保存していたものです。しかし今では、鉄筋コンクリートの基礎を設けているので縁の下はなくなってしまいました。縁の下には風通しをよくする働きがあり、家の土台を腐らせずに、長持ちさせたのです。

基礎が低いと地面から湿気が上がりやすく、通気も悪いと、カビなどが発生し土台が腐りやすくなってしまいます。日本は湿度が高く、梅雨や秋雨など季節の長雨もあります。「基礎はできるだけ高く」これが家を長持ちさせる基本です。基礎が2倍高いと耐久性が4倍長くなると言われており、もちろん、うだつも上がるのです。

平屋は住みやすい

敷地が広ければ、平屋を建てるのがおすすめです。2階建より住みやすい平屋の特徴は、階段の上り下りを必要とせず、平面の移動だけで生活の用が足せる利便性があります。生活動線が短くシンプルにでき、見渡しの良い空間づくりが可能です。上下移動がないため、バリアフリー対応も容易にできます。2階の荷重がない分、耐震性にも優れています。ガーデニングや畑仕事、日曜大工などでも、平屋は庭の魅力を引き立たせるので、庭を家の延長のような感覚で暮らすことができます。屋根が低く見た目が悪い場合は、来客用の部屋を2階の1部分につくります。高い屋根を狙うのは外観デザインのバランスを考えるうえで良い方法です。

見　本

居心地

天井は、間抜けにならない吹き抜けを

吹き抜けのある空間は開放感があり、素晴らしいものです。よく、1階から2階をぶち抜いた空間が見うけられますが、あれは吹き抜けではなく、間抜けと言います。吹き抜けとは、1.5階ほど高い空間のことです。あまりにも高すぎたり、広すぎたりすると空間のバランスが崩れて、心地よさが損なわれます。和室は、座って生活するので、洋室より天井をやや低くした方が心地よさを与えます。

部屋の隅が心地良い

家を建てる時は、人生が成功している時なので、窓を大きくつくってしまうことが多いですが、人生明るい日ばかりではありません。集中するとき、落ち込んだ時、悩み考えるとき、人間（動物も）は明るい場所よりも暗い場所を求めます。部屋の隅にうずくまったりするのは、薄暗い場所のほうが心理的に落ち着くからでしょう。

家というのは多少薄暗い部分がある方が住みやすいのです。日本人が昔から愛してきた光と影は、暗いところがあって初めて明るいところが魅力的に見えるものです。大きな窓ばかりではなく、幅を狭くして、高さをとり明かりを確保する窓も良いものです。

自然素材でまとめる

木と土と紙などの自然素材をベースにした家づくりは、湿気の調節に最適で日本の気候風土にマッチしていました。冷暖房などない時代の本当のエコライフが息づいていたのです。土壁、ふすま、障子、畳という建材を駆使した昔ながらの家では、穴が開いたりへこんだり破けたりはしますが、子どもたちに怪我はさせません。プラスチックや金属などはキズもつきにくく丈夫ですが、人には優しくありません。キズが増えてゆくごとに家族も家も共に成長するのです。人に優しいことは住宅の重要な性能です。自然素材を使った日本の住文化を忘れてはいけません。

木火土金水

「もく、か、ど、こん、すい」とは、古代中国に端を発する自然哲学の思想で、万物は木・火・土・金・水の5種類の元素からなるという説。茶室は、この木火土金水で構成されています。柱と天井の木、お茶を沸かす火、土でできた壁、釜などの金物、そしてお茶をたてる水。宇宙にあるものが小さな空間に全部あります。茶室は言わば小宇宙なのです。狭いにじり口をくぐると、四畳半とはいえそこは全宇宙を体現した広大無限な空間です。不思議と落ちついて居心地がよいのは、この宇宙を構成する要素があるからです。なにかひとつでも欠けるとおかしいのです。

心地良い色は、子どもの時より見てきた日本の風景

日本人は、色同士の「合う」「合わない」を敏感に判断し、色を見分ける能力が高い民族です。空間の中で色が多くなると、"ごちゃごちゃしている"と感じます。それは、空間において素材そのものの色を大切にしてきたからです。例えば、古民家などに見られる建具、畳、土壁、障子、そして天井も素材そのものの色、あるいは素材が経年変化した色が多いのです。草花や自然の中の色が多く、日本の主な伝統色だけでも約450色と言われています。朱色の赤、紺色の青は、木の色と相性が良いので、そういったインテリアには心地良く合います。イタリアやアメリカの赤を1点、わざわざ入れるのも空間としてまとまりがあれば、アクセントや愛嬌にはなります。

三澤 千代治の 住まい文化の栞

古いものを新しい方法でやる

古いことをそのままやっていても、時代の流れについていけず、必ず埋没してしまう。そうかといって、まったく新しいものというのは、突然世の中に出てきて、それが受け入れられるケースは少ない。最初はモノ珍しがられてブームにもなるが、長続きしない。

「習いは古きに、創意は新しきを」。能楽や茶の湯の極意としても尊ばれてきたこの教えは、日本人の変わらぬ信念として、今に受け継がれている。同じ教えを、家づくりでも実践したい。

HABITAの家づくりの基本は、昔からの伝統的な日本の住宅をいかに新しい方法でつくるかに重点をおいている。ミサワホームでの家づくりも、このことは常に意識していた。自分でいうのは口はばったいが、いまや住宅業界で伝説ともなっている「ミサワホームO型」も、日本の住宅、建築を強くイメージした。大屋根の中央部に載せた越屋根は城のイメージだったし、その下には屋根裏部屋というプラスαの空間がついた。大屋根の裾野をめぐってつけた黒く太い半円状の樋は現代風破風だった。「蔵のある家」という商品もそうであった。

私が日本建築の良さを思い、住文化の継承を説くのも、日本の良さをなくしてほしくないという思いからにほかならない。日本の古くからの文化、伝統を新しい手法で継承していく。それが、“新しい日本の住宅”なのである。

さらにいうなら、日本建築の良さ、伝統を知らずして新しい日本の住宅はつくれない、ということである。玄関・畳・床の間・引き戸・大開口・縁側・障子・風呂など、日本建築に学ぶものは多いのである。アメリカでも、日本の住文化は高く評価されている。実家となる家、住み継いでゆける家を、古き良きものから学んで新しい日本の住宅をつくりたいものだ。

住まいは巣まい

天井の高い家には大物が育つ

人間には心理的安定感を覚える高さがあり、天井の高さは、住む人の心理に大きな影響を与える。

偉人といわれる人物に関する事柄や伝記などを調査※し、さらに現代でも活躍している100人に、子どもの頃の住宅について取材した結果、天井の高い広々とした空間の中で育った人が、将来名をなす大人物になるというケースが多いことがわかった。とくに、作家などの想像力を必要とする職業の人、また政治家などの広い視野と見識を必要とする人に、そういった傾向が見られるようだ。高い天井や深い奥行きなどが、子どもの空想力をかき立て、後年の活動に大きな影響を与えたのではないかと推測される。

広がりを感じさせる高い天井は、のびのびとした解放感をもたらし、豊かで快適な空間を生み出す。しかし、天井を高くしただけでは想像力豊かな大物に育つという根拠はない。高い天井の下でどのように過ごすのか、それが問題だ。

住まいは、人間形成の過程にある子どもたちに、とくに大きな意味を持つ。子育てには環境の善し悪しが大きく左右する。人が住まいをつくるように、住まいも人をつくるのだ。

※ミサワホーム総合研究所調査より

403 住まいのオーダーメード館

キンダーフック　SAKANA

子育ての大きなテーマのひとつである片づけを、躾ではなく自立とコミュニケーションのきっかけと捉えた子ども用フックです。

親は子の成長を願い、壁にフックを取り付けてそっと見守る。

子どもは親の愛情を感じながら、フックのかたち、手触り、動きを楽しみ、自分で考えて好きなものを自由に掛ける。

自分でできることが嬉しいと感じると、片づけが楽しくなる。

知育玩具ではなく楽しく自分で片付ける習慣を養う、子どもの自立を目指した製品です。

長く使っていただけるように、安全・安心なことはもちろん、環境にも配慮されています。

暖かく肌になじむ四万十ヒノキ集成材は柔軟や反りに強く、人と環境に優しい素材です。仕上げは植物由来のドイツ製自然塗料OSMOを使用しています。

見本

住まいのオーダーメード館 403
東京都新宿区新宿1-2-1-1F
http://order403.com/
403　検索

材質：四万十ヒノキ集成材
フックは天然木オスモカラー5色
サイズ：幅660×高さ280×厚み30mm
商品価格 / ￥20,000（税込）
403掲載商品No. G-0244_027

住健住康 じゅうけんじゅうこう

交通事故を上回る、家庭内事故死

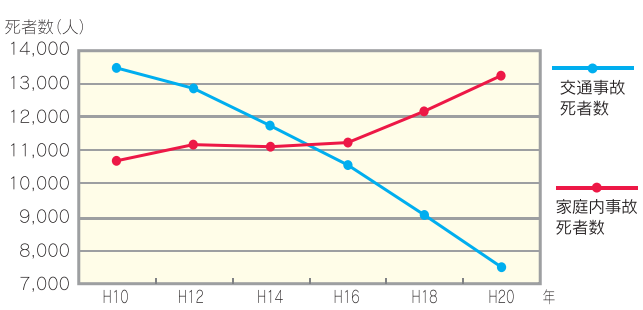
最も安全なはずの住み慣れた家。ところが、最近では家庭内の不慮の事故で亡くなる人が増えている。厚生労働省の調べでは、平成15年度から交通事故死よりも家庭内事故の死亡者数の方が逆転して増えてきている。平成19年度では交通事故で亡くなられた方の約1.5倍にもなっている。

死亡の原因としては、階段からの転落や転倒、不慮の窒息など、全体的に多いのは浴槽などでの溺死や溺水。高齢者にとって、住まいとは車の通る道路と同じくらいの危険性がひそんでいると言ってもいいだろう。

お年寄りの運動能力や動作性がどのくらいなのか、子どもの発達や特徴について理解した上で、起きやすい事故を把握し、その防止に努めることが必要だろう。子ども自身では、何が危険か十分に把握できないため、まず大人が子どもの目の高さで身の回りを点検してみることが大切だ。

家庭内での事故の実態を探っていくと、住宅の安全性や事故を防ぐための対策が見えてくる。赤ちゃんやお年寄りに十分に配慮した家は、だれもが安全に、快適に暮らせる住まいといえる。

家庭内事故と交通事故 死者数の推移（平成10～20年）



厚生労働省：平成21年度「不慮の事故死亡統計」の概況より

庭の話

理想の敷地は1万坪

明治の頃、一代で財を成した富豪たちは成功のシンボルとして別荘をつくった。伊豆にある岩崎家の別邸が、現在でもその栄華の姿をとどめている。

調べてみると、富豪の別邸に共通するのは、敷地が約1万坪なのだ。なぜそうなのかというと、1万坪の庭をひとめぐりするのに、およそ1時間かかる。主が目覚めて、朝の運動をかねて庭を1時間散策してから食事をするというプログラムにちょうどよい面積なのだ。おいしい食事をするには、1万坪が必要だったという、実に優雅な話である。

われわれ庶民には雲の上のような話だが、まったくの夢として諦めてしまうのはまだ早い。こういうことを庶民はできないと多くの人は言うが、私はできると思う。

私の考える庭はこうだ。1万坪の敷地をまず確保し、そこに100組の家族が住むことにする。その敷地内には車道をつくらず、車の出入りを禁止する。敷地の周縁部に駐車場をつくって、そこに車を置いてもらう。駐車場から家まで歩くので、雨や引っ越しのときは不便だが、敷地内に車を入れないことで、もっと大きなものを手に入れることができる。

1万坪の敷地内は遊歩道でどこへでも歩いていけるようにして、家と家との間の庭を散策できるように設計する。パブリックスペースには池もつくる。1万坪をひとつの敷地と考え、スペースを共有することで、実現できるアイデアだと思う。

自分の家と専用の庭があって、植栽した緑道を歩けば、昔の貴族のように1万坪の庭を散策することができる。

三澤　千代治

Weekly HABITA
www.habita200.jp/
第63号 2011年11月　発行：MISAWA・international株式会社　〒163-0704 東京都新宿区西新宿2-7-1　TEL.0120-420014
100円